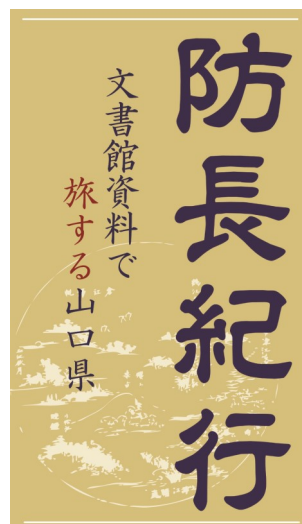


山陽電軌沿線案内（戸島家文書1〈27の26〉）



「つなぐ」「めぐる」鉄道と観光

《「鉄道沿線案内」の世界》

観光や旅行が庶民の生活文化のひとつのジャンルとして定着したのは、大正から昭和にかけてのこととされます。経済的な閉塞状況に覆われていたとされる当時の時代相を思い浮かべるならば、「観光」や「旅行」のブームに浸ることができたのはごく一部の国民層であったようにも思われます。しかし、鉄道網の拡充に象徴される交通の近代化が、観光や旅行といった明るい時代の雰囲気をもたらしたことは事実です。

鉄道の延伸にあわせて、鉄道会社は経営を安定させるために、さまざまな集客戦略を張りめぐらせました。鉄道各社の「沿線案内」には、そのような戦略が見え隠れしますが、あわせて、鉄道を歓迎した地域の熱狂ぶりも感じ取ることができます。「沿線案内」は、当時のトレンドであった鳥瞰図風の沿線ガイドMAPに案内文が添えられ、横長の折れ本、ハンディサイズで発行されました。「景勝地を体感する、神社仏閣や史跡名勝をめぐる、湯に浸かる、舌鼓を打つ」など、非日常に身をゆだね、旅情を満喫するすがすがしさがそこには述べられています。

《山陽電気軌道（山陽電軌）》

昭和戦前期、欧亜連絡の拠点としての繁栄を見せていた下関。その喧騒の別世界として熱視線を集めていたのが、「奥座敷」川棚温泉、「歴史に富んだ城下町」長府でした。山陽電軌は、大正期に川棚温泉株を購入、昭和に入るとレジャーランド「長府楽園地」の経営に乗り出し、観光の創出に腐心していました。山陽電軌の経営路線（電車とバス）が案内図中に赤く示されており、下関近傍との交通ネットワークが形成されていたのです。日和山公園、功山寺、覚苑寺、乃木神社などのサクラの名所が華やかに紹介されています。別の「沿線案内」には、海水浴・汐干狩りの好適地、納涼夜釣り（「小門の夜焚き」）、さらに、苺園・植物園・遊園地・浴場・競馬場・球場などのレジャースポットも記されています。こうした集客戦略のモチーフは、小林一三率いる「阪急電車」にあるとされます。鉄道沿線に、温泉・海水浴場・登山道・動物園・植物園・遊園地を整備して鉄道利用を促したのです。「長府楽園地」が目指したのは、「西の宝塚」でした。



防長の観光
（一般郷土史料B16）

「溪谷美の絶景」長門峡、「奇岩怪石の偉観」青海島、「東洋一の洞窟」秋吉瀧穴。これら「三大奇勝」に、温泉（湯田・依山）や歴史（萩・山口）の魅力を添えた鉄道旅行案内が、門司鉄道局や防長観光協会から数多く発行されました。

